春日龍神
かつらき
江口
まくらしとう
源氏供養
十四

# 春日龍神

ワキ 月の行方もそなたぞと日の入

國を尋ねん　是は栂尾の明恵法師

にて候我入唐渡天の志有るにより

暇乞の為に春日の明神にまいらばやと

思ひ候只今南都に下向仕り候　[illegible]山

志つきさへの原もはるばるとて[illegible]く月よ

あらひの里の松緑は代とも長閑なる
都は山を近みよく見え南の都路
やまとは坂越く三笠山春日のさとよ
ゑりよきゝらし 晴たる空に向へは
和光のかげもあらたなり 文山は
勤さる形を現して是なる神道
を顕し里は年安のうちまりそとみまそ、

人間長久の色そへて盛よこれも久
方の天の岩戸や根の世とゝうや 月よ
うつ影も日本の二柱 那し社の擬を
まうおもところの 神の代よりれ
まうきてもある水屋のかけ遠塵
よましわる神 三笠の森の松風も
桜もあるきぬ気色かしく

皇成宮つきよ中へ參りし事なれバ　やがて是
ハ栂尾の明恵上人にて坊所ぞやがて今
のはじまり給ざし社神悪子蛭數思召けらん
年
「さんば此こしまず神中ホ今の世よあらん
我入唐渡天の志ありよりて脈見れ為に
冬きしまりてハ「是ハ仁にて唐へわたるべし
上人乃申さハ年始より四季打ちのはじま

神の時節乃文逐遠をさしよ給ハね
給ふ神慮にかなひざれバ上人をバ太郎
と名付笠置の解脱上人をバ次郎と頼
まだ女の眼兩の手のごとくなく晝夜
各しまの擁護懇ろなる社殿りてハよ
日本をも去入唐渡天し給ハんかバいかく
神慮に叶ハざりけるぞ思召とおもひ給へ

ワキ「宣ふ仰はさる事なれども入唐渡天の志
も仏跡を拝まん為なれば何か神慮
に背くべき　シテ「是又仰とも覚えぬものかな仏
在世の時ならばこそ見仏聞法の益もあらん
されば今は春日の御山こそ霊鷲山なれ
べきさこそ思はん上人初めの時は奈良坂の
此手柏の二面とにかくに人間によ



なほ〳〵あさき　上歌「三笠の森の草木
靡く風も吹かぬに枝を垂れ春日山野
邊に鳥たつ鹿迄も皆悉く出向ひ
膝を折角をかたふけ上人を礼しまうる
かゝる奇特を見ながらも誠の浄土は
いづくぞと同じ武蔵野の果しなの
心や迷ひぬらん我頼む社のまよひ

止りて神恵をあふかれたりしませく
利を當社の守護におかれけり
給ふは入唐渡天をとけれは仏法流布れ
名をとめし古跡をたつねてあそひし天
台山を拝しくれは叡山にまいらるへし
又霊山のちかきあたりは出家筆波をとあ
すへし　昔は霊鷲山とそ流生を

度きしとそ大明神と示現し此山に宮
居し給ひ　即霊鷲乃太山たる妻自乃
此山を拝むへし　我も来れ釈迦牟
尼佛出よりもさやけき月の光を照
天の御神詠もありたまひぬる檀
ひあらは慈悲万行の神徳乃まひを
照まと救あれやれ機の衆生れ益あるを

思ひ給ふ御姿瓔珞細軟の衣を脱麁
弊垢膩衣を着しつゝ四諦の法を説
給ひし鹿野苑も爰なれや春日野に
誕生は摩耶の園生ひや　其外当社
の有様の山は三笠に隠ろひや飛火の日
ろあらに顕はし誓ひを四方に春日
野の宮路もまあるや日暮りなき西の

大寺月もみがく光を増す七大寺の
法の花も八重桜の都とさく春日野の
末社のときはなる神　守護宣あり経を聞仏
や我御弟子をば神託と思ひ定めて此
度の入唐をばおもひとまり給へし仏在世
いゝ候へ御名残ありて給ふべし
入唐渡天をとゞまり給ひて三笠の山に

五天竺をうつし摩耶の誕生伽耶の
成道鷲峯の説法　雙林の入滅迄
ことごとく見せ申すべし　暫く爰に待給
へと錦宮守の神の告我は時風秀
行ぞとてかき消すやうに失にけり
神託まさにあら〳〵あらたなるよ
星見えし春日の野山金色の世界と
曇くもまよひも仏縁とあらはれき
なり〳〵　時に大地震動するは下
界の龍神の参会か　すはや八大龍王よ
難陀龍王　跋難陀龍王　娑伽羅龍王
和修吉龍王　徳叉迦龍王　阿那婆達
多龍王　百千眷属引つれて平地に
波瀾を立てゝ仏の會座に出来して所

法を聴くまゝれ是又妙法堅那羅王
持法堅那羅王楽乾闥婆王
楽音乾闥婆王婆稚阿修羅王や羅睺
阿修羅王乃恒沙の眷属引つれくこれ
も同じく座列せり龍女が立まふ波瀾
の袖白妙なれや和田の原の松が枝
白玉立みだれ光色もうつろふ風や

沖ゆくいさり月のミちみなれざほのけつら
ようひ出れバ八大龍王八大龍王も
やつ乃冠をかふりき前にまし白妙の月
れ三笠の雲よりほとも峯乃野守も
いつくしやよや摩耶の誕生鷲峯の説
法双林の入滅ことごとく終く見せ奉
るや明恵上人法入唐をとまるべし

地「渡天はめでたよ　シテ「海ましし　地「仏師には

シテ「壽ぬきまじや　ワキ「都のうちも此うへ

あしのやうにさもなく龍女は南方に

善行は龍樹は猛沢の池の青浪を

たくきこそ昇けき弄の大蛇と

あらはれ天にものぼり地に蟠て池

水を守護して哉よきり

次第 舟橋

山また山の行末や雲路のしるべなる覧

ワキ詞 是は三熊野より出たる

客僧にて候 我未松嶋ひらいづみを

見ず候程に 此度思ひ立松嶋ひら泉

へと急候 道行 錦織わたりの白雲の

川の波 織女の契りまつ年に一度

いかに夢の醒井の宿をもいさ伊吹
尾風のとまりの三月雲霞もやその尾
張善をさたれと雲心なく鳥の向
星ハちやと参國伊勢とや所よりまして
此沢不知くやともかうやと成れ
法ようる道そて作る八橋ハ波の世かい
くる頼うれ住みの御庵として何か

まことちおもまつれるき橋よ物なれそくちく
ふわざほよ堀江れ川の辺おき付よりえく
宮めぬあまた波の塩世よ帰れ出て六の道
前まつりのうる必をかかけ一それあとい
みくの跡きるくと昔ひやまれ前の
世の馬ひのまくよはれきうく心よ
かけハ世逃みのうれ乃海を渡るへきに私

橋をつくるや二河の流れは白道なるらう
科第十八の道多し其の橋を渡さばや
シテ「いかに客僧橋の勧めに入りて
御通り候へ ワキ「見申せば真俗済のためとし
て橋の勧めの志ばかくもやさしう
候 シテ「是は信心の為ならずあまりかゝる難
所にある(?)とてかく志の有まりさて

もうかるべき勧めに入りて御通り候へ
ワキ「勧めに入り申すべし偖此橋名所の由来
より渡されける橋なれこそ ツレ「万葉集
にも東路の佐野の舟橋とりはなし
と読まれし心をばしらずや
シテ「いや佐野よやもかしやかのいふ(?)
ワキ「陸奥山(?) てっかも流るゝ此河のざつ

出中そこりわさたよ若しき女ほさ三
瀬川より左よりれ舟橋を渡りく
たのもしくとよ　守らせおやさきそれ
如物語掛るより　船橋の圭を
たときこ其ためわ　峰定見ハ山伏
岩橋を渡し給ひて　夫も山伏
の身なれくさくぶかな橋を渡ましき

さのみなれとそひ給ひそよ役乃
優婆塞葛城や新しと久米路の橋ハ
めゆま　筈とにへきに身はあうね我も
女の月きき乃称　一言葉小くやむ
ましや鐵度も岩橋の　あと可心
ようきたるぬ去なりて金剛小くには
も葛城やよう我作るある岩橋なくハ

渡らんとすれどもかなはずして　身はあさ
妻の日の暮方に水の舟橋よさらして柱
もつれまやうつるよ朽果てしを作り
給へ山伏　所望申し候の佐野
の渡りの夕暮に袖うちはらひ流れ通り
あるいは篠の葉のそよぐも末世河風の花
咲く海を舟橋ならばゆきて此道作らせ

山伏修行のついでに渡りを通りては
いかに申し候此方へ行き給ふべき　候　万葉集
にも東路の佐野の船橋とりはなし
親は離くと二流によまれたるは行と
やたる謂はなく候　さん候作ぞかしよ
付く物語の御語りて聞かせ給へ
昔此所に住みける者忍び妻よあふこか

まで前なる川を隔てゝこれハ此舟橋を通
として上るおく通ひけるよ二親ハ
下をゆくへひ橋の板をさへはなれぞ
我とハ夢にも知らずしてがきとく〳〵我し
捨れ上よりざぶりと落ともあらくなる
妄執と云因果といひ忘まく三途の流
でまずゞお尊大紅蓮の氷に閉られて

うき世をあさき苦みの海法あかの川
橋や盤石よそされ苦をうくるうはなへ
沈ミも果ずとて竜ハ身を責まれる乃
鬼と成るつりあふを慈悲のみるまく我
嫁の思ひの吉こかまぢゆく舟橋も古き物語
誠ハ身の上ある我彼をひゝくと絵へ
夕日かう名へくるかきるくの露の宅

それのみか雲となり雨となる中
なれ道をしもつなぐ橋とみえしも中絶
ぬ宴はまりく東路の佐野の舟橋
身はあり鐘こそ響を夕暮の空も
あきよ成よきりく ふりふし跡
をあらためめぐく三宝かおの行ひ
よ五道の罪も消ゆへき法の力ぞ有



難きのく いうよ行者の頼や便よ
三途よ沈みし身なれども法の力か毎
橋の浮身と成有難さよ めでよ
行者我はありし洪毒執の故よより
ぎうし急つる橋柱のあやしき苦患を
かをやしさんがく涙雨とふるまん渡川
氷海流りあはれがくつりくらおもよ 地 みそれ

やうまきあ波の　挂をとつるき磐石
の君患　地　あまくあらは法まいや
見就成着發菩提の功力を受らいう
太子漢あらもの涙のみくつとあそを教戒
心者郎成なりかうかるや　痛りや未
邪嫁の葉すつき其執心をみり捨らく
耕く首と懺悔志ん　行るを懺悔

よ羅の雲を消らく名ぬ月を出つべし
五障の霞の晴かるきまの空乃一時
胡蝶乃夢乃たりあきよみつくし海を
見えやきん和りやさ野の山あるまと
光も妹背乃手川の　捨乃とあらし雲
なきるとへだ白波乃よるとこし　二
廻る淵ふる浮に形のかさよさう形く思ひ

妻ごひに通ひ馴れたる舟橋の、さへ渡る
夜の月もあはれと更けゆく
上地 人もなほうちしきさへ川風も
いとゞ逢瀬の向ひの岸にみえたる
人影はそれかとばかりやたのもしや
上哥 嘆きながらもとりまはし中の橋
を隔てゝ立ち渡る波のよるべの橋ばかり

けふの行あひの雨もくらくなるまゝよ
離きる板を踏みはづしけり落く
沈みけり 東路のさのゝ舟橋とりはなし
親しさくれば妹に逢はぬかも
執心の鬼となつて共に三途に逢れり
橋の橋柱に立ちながら悪気の氣色
よ替りはとなく生死をやその妄執邪

橋の悪鬼とあらく我と共も責苦
患よ去る世をと行者の法味。功力よる
真如発心の橋の真如発心の底
橋乃うへ我身とそ成よまゝらく

江口

次第 月ハむかしの友あれや〳〵世乃
ふる事もおもハれし 是ハ諸国
一見乃僧にて候我いまた津乃国
天王寺へまいらす候程に此度思ひ
立天王寺へまいらはやと思ひ候
都をはまた夜深きに旅立て

淀川や舟行末はうどの芦のほ
の見えし松の煙の浪よする江口
の里に着にけり　是
なるハ江口の君の旧跡とや痛はし
や其身ハ土中に埋れぬれども名ハ
とまりて今迄も昔の旧
跡を今みる事の哀れさよや

西行法師此所にて一夜の宿をかり
けるに主のかさゞりしかば世の中
をいとふ迄こそかたからめかりのや
どりを惜む君かなと詠じけんも此
所にての事なるらんあらいたはし
シテ詞
や候　なふなふあれなる御僧今
の歌をば何と思ひよりて口ずさみ

さひ給ひけり　ワキ詞　ふしきやな人家も
見えぬ方よりも女性一人来りつゝ
じの詠歌をくちずさびしをいふと
とがめ給ふるぞそも何故の事やらん
女「長く年を経しあとをば思ひもよらで言
の葉乃末のかきおきし露乃世をとい
とふ道こそかはらめかりの宿りを



惜むとの其言の葉もつらけれ
ばさのみは惜みてまいらせず其理
をも申さん為にこれ迄顕れ出たる
なり　ワキ詞　思ひよられ宿りを惜む
君かなと西行法師が詠ませし跡を
ば何とおもふ帰る所のこれは
まさなしと理を申すは依いふ

ある人にて御しまし候　いやさ
きはこそ惜まぬよしの返歌を
申しゝをは何とて詠しもせ
させ給はざるらん　実其返歌の
言の葉ハ世をいとふ　人とし聞けは
かりの宿に心とむなと思ふはかりそ心
とむなと捨人をいさめの中を遊女の

宿りをとゞめし主とせぬも理あるまじや
実ことわりなり西行も仮の宿りを
捨人といひ　此方もあるよあ色に
見の家ハさしも埋木の人しれぬ
事のみ多き宿よ　こゝろとゞむなと
諌し給ふ　捨人を思ふ心あるを
惜むもをしまれ　言乃葉まて　打出

うそで惜まぬ假乃宿あるちがふくなど
や惜むといふ浪のうかれぬいふハ
今とても捨人乃世語に心あるく
めかしひつう　云やうき世乃物語
ぎき及姿もたそられよかきる人
云いかれん　ふるうかまよだきも
歎きはのくとみえうくれあるに

く夜よ江口乃流まきの君とやりえん
きつうや　接き髮ひ行う穢れ波と
消よ跡あまるや　かりよ住ぬ我
宿乃　梅のたちえやりし何く毎し
思り乃ありよ　君かききまきるや樹の
陰よや宿アきんぞ又ハ一河の流まれ
水汲くもきろめきれよやこ江口の

君乃幽霊そと聲ハかりして失に
けり　扨ハ江口乃君乃幽霊か
仮よ顕き我よ言葉をかハしけるそや
いさや弔ひうかめんと　いひもあへ
ねハふしきやな月すみ渡る汀
水よ遊女乃うたふ舟遊ひ月よみし
音る不思議ゃよく　川舟をとめ

めて逢瀬の浪まくらうき世の
夢をみならハしの驚かぬ身乃はかなされ
はよざよひめか松浦かた敷袖乃
涙乃唐土舟乃名残ありまし宇治
乃橋ひめもとはれぬ人を待も
身乃上と哀ありしや山吹乃
や芳野の花も雪も雲も浪も

あらふしぎやな月
すみわたる水の面に遊女のあまた
うたふ謡色めきあへる人影はそも
誰人の舟やらん　何此舟を誰舟とは恥
かしながらいにしへの江口の
君の川逍遥の月の夜舟を御覧ぜよ
そもや江口の遊女とはそれは去りにし

いにしへの　いや古とは御覧ぜよ月は
昔にかはらめや　我等もかやうに見え
来るをいにしへ人とはうつゝなや
よしよし何かと宣ふとも　いはじやきか
じむつかしや　秋の水みなぎり落ちて
去る舟の　月も影さす棹の歌
うたへやうたへうたかたの哀昔の恋

さを今も遊女乃舩遊ひ世を渡る
ひとふしを謡ひていざや遊ばん
十二因縁乃流轉ハ車乃庭よ廻る
がごとし　鳥乃林よ遊ぶよ似たり
前生また前生　曾て生々乃前
を知らず　来世なほ来世　更に世々
世ゞ乃終りをわきまふる事なし

あるひハ人中天上の善果をうくと
いへども顛倒迷妄して未解脱乃種
をうへず　或ハ三途八難の悪趣よ
堕して患よさへられて既よ発心乃
媒を失ふ　然るよ我等たまたま
受がたき人身を受けたりといへども罪
業深き身と生れことよためしすく

あるいは川竹乃流れの女となる前の
世の報ひまで思ひやるこそ悲しけれ
色 紅花の春乃朝紅錦繍の山粧ひを
なすと見えしも夕べの風に誘はれ紅
葉の秋乃夕黄纐纈の林色を含む
といへども朝の霜にうつろふ松風羅月
に詞をかはす賓客もさつてきたる事なし

翠帳紅閨に枕をならべし妹背
もいつの間にかは隔つらんおよそ心
なき草木情ある人倫いづれあはれを遁
るべきかくは思ひ知りながら 上 あるあれ
時は色に染み貪着の思ひ浅からず又
ある時は声を聞き愛執の心いと深き
心に思ひ口に言ふ妄染の縁となるものを

穢土や皆人の六塵の境に迷ひ六根の
罪をつくることも見る事聞く事に
迷ふ心のあるはし 上枝 おもしろや
女上 実相無漏の大海に五塵六欲の風は
吹かねども随縁真如の波のたゝぬ
日もなし 下女 浪のたつにもおもふは
ゆくへは假なる中空の ころとしらへ

上枝 こゝろとめぬいはうき世をもあらし 下女 やっこと
ちきりをきし 上枝 御言葉もつく 下女 やうな路
ものあはれなり 上枝 花よきみちよ月
雪のふることをもあはれし あはれや
下女 げに假の宿の 思ひをかりの宿に
心を留むと人をたのみさめし我ある
見えまでありや帰るとて則普賢

菩薩とあらハれ舟ハ白象となり
つゝ光と共に白妙の白雲にうち
乗りて西乃空ニ行給ふ有難くぞ
おほゆるありかたうこそ覚ゆれ

## 花筐

男サシ
是ハ越前国味真野と申所よ
住給ふ大迹部の皇子ニ仕へ申者
ニて候扨も都より御使ありて武烈
天皇の御代をたもちまつる皇子よ
御ゆつりありけれハ遠乃人となり御下
れ候間さきたちく御上洛ニて候去

扨此程は寵愛ありて召つかはれては
照日の前と申は君此程は暇なく
御座候ほどに彼御方へ御文は
上洛につきては玉章と朝毎に御
手に馴しは花筐をまいらせければ
もど身に持てまいれとの御事に
ては程に只今照日の前の里へと急候

急ぎ候ほどにや是へ案内申さばやと思ふ
いかに案内申候　（照日）何事にて候ぞ

男「我君は都より御使ありて御位に
即をつぎ給ひきとくとくは此御文まいらせ候
又是成は御文と御花筐とをとも慥に
まいらせよとの御事にて候これく
は御覧候へ　女「扨は我君御位につくを

語ひ散への御よりゑをひくもしは
めてたかりそ久とよ去ありし此年
月に治る語の古の世よりハ長るべき
あし御名残惜しやはれをも思ひ
長れはとして御玉章をと語し直を
語りすれ首かさはよく急きたてまつり
きのちの世我應神天皇の孫首を

継ありし帝位をとかせ給ひよあり
はかまども天照太神の神孫あまへ
毎日よ伊勢を拝したてまつりし
其神感乃至りあや君臣のえらひ
よむされてはなかれゆく雲のよめ
くもりあつべき月影をあきの軒ことよ
語をあり頼めたく雑かまき別し月

歌の志りハ雲井まへこそありけりと
書直ほし水ぐきの跡よ残るそ
悲しき 君をも母を猶たゞよ有し
山里よふくかうり跡ありてかゝ佃乃
つまあさの玉もをときまかく松の風を
いつしかよ咲ける乃跡とそてまうつしき
御花筐玉章をいつきまそ里まかわ

きりく 君の恵もたかてゝりに
ぐく紅葉乃御幸かやめん かつきを
あくも此君ハ應神天皇五代乃御末
大あとへの皇子とやしかば當國ニ御座
位にさまりて継躰天皇と申也
はきハ治まる御代乃御影目れ太平れ
ゑもしあひよあふ 大和國や玉穂の都よ

今宮造 あらたなり 萬代の
めくみも久しき草乃つくも
さらゆく秋の霜露も志られも時めきて
男山よ色よ茂りまつ千歳も松もちとせ巧れ
みとりあそとききの枝よめくりあへ御
幸の車をやめん いつあれ成
様人都への道をしへ行社

とやおもふひとよのあまねき社とて
都人情なくもありけるや
あふ人へもをしへ都への道しるへ社
はあまき志けん鷹合乃濃りは
行あるよわかるるとや今思ひ出し
こりぬはいつも鷹のねの南へわかる天
津空と あらし吹かまて都を

やらんもうれしあはれハ　おもひをしる人の
ならひなと　我もたの世の旅合
こゝろまて都路乃志るへあれ　其上
なほ打ふ顔武の様鳥　玉章をづきし
南の都路よ　我もともたよつれてゆき
宮かりねの様衣　とひころもわれ
ざろうろか　君のまとせうしの白山まて

狩ひけきこてやま東のやまとへ
いはく白雲乃高間の山のよそのこ
みくるやまとあしのはかなさ雲井八行く
御歌山目の本なまこや大和あさき海
ほの都まよまりあり　家へあつまの
海あまりやうよしあしくもなうめ
恋ようき舟乃　こかきゆくたびを

思ふのもより哀く滋もしら黒髪
乃あかりあらし別路乃あとよまその
うらかれきて鹿乃起伏堤のねさあさを
道ひゆく秋草の野をくれ山路の露
ちかく玉ほの宮にまいりつく
時しも比は長月やまたき時雨乃いろ
うすき紅葉乃御幸の道の辺よ



非形をいましめ面々よ御幸の御先
を清めけり
シテ けるあさましやてよ
地 あまりのひおん人乃女くるひ狂人とらひ
ばうさ心へあらのちの風をみまあく
露霜乃御幸のもちさよますよまり
上歌 みきやあるさ風人よかきりたれ
狂女とみえて見苦しやとそて官人立

よりおひきりずこのきはへ　あら
かれしや君れは花筐をうち落けるを
てはいかゝよ　何と君乃は花筐を
打落けるたるやしやあら悔しの
事や　いかに狂女持つる花かてを
君のは花かゝることて渇信せるへきも
君とハたゝかちとやう　ことあら

しきしまや此君あらて日の本
よはまことゝきこえれはまよひき[illegible]
我らハ女乃狂人なれはおそれしと思
はうくかすきをなくも此君ハ應
神天皇五代乃御孫[illegible]越地
國乃あちまのと申山里よ　おほ
あとへの皇子と申しゝか　[illegible]とハ此國玉

ほうきよ　継体の君とやとうや
地　はうまきハかいほとよめてたき君の御
花かつミを賜ハりもおさそ　うち
落し給ふ人ぞかし　秋よりも先に
わくらハに　上音　わくらバや世に
世をなみといへど月ハ地に落さ
まだちりもせぬ花かつミをもあらされ

やあらうねたよ捨しゆきらバ天の
とうめもたちまちに御詠あらうゆひ
てさびさとくある扭乱してもものお
まひとくいちはちきゆふあハ人よいきま
きせ給ふおか極よりを賜く
うつあきさ花筐かいとうやみほとを魔
此君つまり其比高皇子れのみあれど

あさことの御勤に花を手向給ひし
南無や天照皇太神宮天長地久と
かしはてはうち給ひつかば手をあはさせ
給ひし面影を身よりひてかはとれ
形見までもたまつりやひしや
陸奥のあさかの沼の花かつみかつ見し
人を恋種の忍ぶもぢずり誰ゆへぞ

乱れ心ハ君かため雲ゐまて空も隔
てる月の都ハ名のみして袖もうつる
はかなの文手にもとられぬ影徒に水
乃月を望む猿乃ことくにて叫び
かつて啼居たり　上哥　かゝる狂女
宣旨なく有て御車ちかくまいりて
いかにも面白く狂ふて舞遊ひ候へ叡

狂人のへきとよ御身をみておわらうべぞ
よく狂ひ候へ　ツレテ　それや梅はなほひ
あさがほは影をたのみてやへきいはうや
狂ぢんもろ共に　御幸に狂ふの中
こそ　地　月にかはらぬ古をとおもま
サシ　かくしきをあさはたとへあまたゞ　いろあれは
上　漢王へ李夫人はあさまをも嘆き給ひ

あまつさへ秋さびしく君の給ひ
も侍より思ひの涙は夜の袂をぬらし
トレテ　李夫人は紅色の花のよそほひ
衰へて忽ちに露の床にふしぢりぬれ
鏡の影を持ちても終に帝まで
給ひて去りたまふ　クセ　御門かなしく
上　歎かせ給ひつゝ其はかくてを甘泉殿の

かへにうつし我も畫圖に立そひて
明暮歎き給ひけり
げに思ひハまさりけるおもひ草の事
あまさへぞうく歎き絵へハ里きうと申
太子のびときハまします父帝に
そもそも李夫人ハ本ハ見
上界の嬋娟たりいつくの仙女なり

一旦人間に生るゝとハいへども終に
元の仙宮に帰りぬ泰山府君に
まうちく李夫人の面影をしばらく
爰にまねくべしとて九花帳の中に
して反魂香をたき給ふ夜ふけ人
しづまり風すさまじく月秋なるに
それかと思ふ面影のあるかなきかに

かゝるへ我はやましの里の者までも迄
よもぎふ白露のてふもたまらて
猶もなく唯いつゝよ消ぬきえ凛
勝偃揚くしてへ又尋ぬへき方なし
上ゲテ
抑しさあまりは秦の丈人のもたん
あはれ甘泉殿を立ちのぼゞしき
殿をうちうひかるきふのまだ古き


れびさゝり弦もかなしく　宣旨なく
あるうく具花筐をまゐらせよとあきに
御わかれるよ胸ふさがりぞ空なる
花かたみをとだえつゝありつゝまいらせ玉へ
帝ハ花を数添んかぞ疑ひもなき
田舎かく御手よなまし御花筐
打なくしとゝめ直路ひし信玉章

の様ゝをわきまへれバ狂氣をとゞめよ
本のごとく召つかはんとの宣旨也
シテ上 宣旨の難有やはめぐみ直なる御代は
ゆるさるゝもおそれたもちしかりき
のごとく 彼ほどもよ時にあへ
シテ下 花の筐をとゞめて 恋しき
人の手跡しあと シテ下 かなしとおもひ付そ



か事 此時よりも シテ下 つまり
まゐる 上 あまかしたやすく計情乃色
をたて露のめぐみよもきめ花筐
の始かとまします まりぬ君の御こゝろ
すあふかさき 花桜もちそよ時
るゝく〴〵海雲ゟ手あしたく
まつらと倍ちの人は車やまつ

きをみち峯りとふきちさもと拂
ひださみや我をし山風よおちうれ
ゆくや庵ほの都ぢちうつきゆくや
へ庵おつきやてよづきのきぬちきう
うおりかさの

## 源氏供養

次第 夜も同し苔の道つゝく石山寺よ
まゐらむ ワキ詞 是ハ安居院乃法印ぶて候
我石山乃観世音を信じ常に歩みを
さうひぎみもよしまゐらやと思ひ
上歌 時しもわれも花の都を立出てゝ嵐
まつるゝ夕波の白川になかてる行は雲

羽衣とよみし関はあけの月
霞たなびく明の影もあかあかし
よ鳴の海まで面白き景色よなかく
濱ちどりや志賀唐崎の一つ松塩やね
とも浦の浪たつともなく水のきよら
あはれなく あはれく安居院の法印よ
よくきけば法印とは八ちたかの

廿上

やまをこして行ゆすぎ 我石山に
こもりて源氏六十帖を書きそめしあさき
紫の筆のあとをとゞめしその形見とは成
なき名は源氏に綴る信濃をとさそう
し料よりこすせすかくなつやくは
紫る人はくに山にきく源氏の浪とて
宣ひける跡をひてたびたび絵へと此るゆ

けふとて是迄まいりたり　先ハ思ふ
ことしらぬ身を所持にまかる安閑
然るに供養をいのべくもなし　拙都に志
して回向申べき　先石山にまいりつゝ
源氏の供養を宣給ハゞ其時我も
顕れてともよ源氏を弔ふべし
うらやまれ法事特別にして源氏

と書しハ　恥かしや浮世の事を
あれ見よ名をも螢まぬ苦の声ゑ　石山
寺より出る雲の　紫式部にてまし
風とか　ちつりやハゝよむこうむき
ちのくもも春の夕日影にて
それ花の雲ぞかけまゐりしかば失よ
きえし　扨石山にまいりつゝ念誦をと

いつとても終りは是し更かくるの鐘の
音も心もともる折節に ウかつる法氏
れお禄お繊かられ手あれを 「但演を
のこして紫式部の 筆枕と浮くとよ
今いあり 花ハ思へとも分たし世
のやび夢まうろよ紫ぞある花も
一時のうがあいふも消しいふ人の笑海氏

れおかうり闇よつきても真まこと頼こ
まくゆさしたか人 松風もちれい
筐と御面を吾の山の紅葉 名も
紫のめ出ちく みえん姿ハうつりや
かくて是も深更よあり鳥れ音あきのまり
ぺまこきの節燈の陰とされはさもうつ
きしき昔ばなしも是あのうちそとり

シテ「歌はよくよみしかどハ夢か現か覚束な
女「うつろひやすき花色の袖さへぬれし衣の
きつゝなれにし恋の八重紐みえし枯野の荻秋
ぞその萎増もる思面ハあの人と
言ひめされしもや　シテ上「恋は色よハ出ずと
あふましの言葉の末よハ心ある恋式
都にてますいひ　女上「まつりなつし我姿

シテ「其面影ハあらぬそらし　女「恋す人もかへらぬは
シテ「たゞひとり心を　女「なさけもきく　ねかきそて
下「あら恋しの昔の月も心きよく石山寺の
鐘の声浮かともさそふ風の前消えハ
かまごう燈の光浅茅の跡をとへく
下「意かゝ猶れたるや行衛かまよしまよせん
へき　シテ「いや我身ハ思ひもよらぬ

げに世は夢のうちの昔を今に華の袖
見えつまつらく今ぞ知る花の外なる
春とてや何をいそぎて肖へさらでも
はかなき人とそ大学寮の法の
色あつきさすがぬの目も紅の
あつさなどさら恥かしきやうなと
行方も胡蝶の忍ぶ夢なりけり



あるは舞の袖ぐるまのうちをこゝをあかず
花の袖衣の色かさね法に尽もとる
光無常といふは目のあたりなる像も
あれ一生身のほどはかうして百年を
送る槿花一日は世に家を
あらぬ法式部頼みをかく西山寺
悲しみを慶びに籠もりつゝ此の歌を筆

よまんは、これを終りに法の舟をさしよする
科によるべの妄執の雲も晴難し。今逢
難き縁によむらさき式部の筆をもつて
一つの巻物に写し無明の眠をさまし
南無や光源氏の幽霊成等正覚
桐壺の夕の煙すみやかに法性の
空に至り帚木のよるの言の葉は

終に覚樹の花ちりぬ。空蝉のむなしき
此世をいとひては夕顔の露の命を
観じ若紫の雲の迎へ末摘花の台
に座せば紅葉の賀の秋の落葉もよ
しやたまたま仏意にあひながら
上 榊葉のさして往生を願ふべし
花ちる里に住むとても愛別離苦

れとりまゐらする道となるや御
まへハ生死流転の浦々を
出る智者明ハあしの浦よりも門
くらいつまでも行ける蓮華生の宮
おりく菩提の道とはなりにけり松風ハ吹
とも業障の雲ハ晴るゝ峯
行くよ秋の風吹きても生ずるぞ

君将ハ藤まろの上品蓮台に心をかけまさ
てまつる七宝荘厳の桂の
もとの梅かえのかひようる我
心藤の花の紫の雲ハ真如の月
を見る檀ハ松をあしたな
ハ梅檀ハ陰よりやさしきもろともに
位を求めハ内ミてめぐるたのしみ常人

と浮舟よたとへんとや是も蜻蛉
の身なるへし岸うつ浪のうき橋を打渡り
身の来迎をねかふなり南無や西方弥
陀如来狂言綺語をふり捨て讃やア
かほのよしを花ときまくへとをろそもよ
鐘うち鳴らして日も既に暮れぬ
面白やまひ人のかざしの花やかく

鳥の音もうすへも嵐や光源
氏の御あとを弔ふ法のちからにて
我も生まれん蓮の花のえんなるかたの
をしやいまやあしたの秋のひかり
夕顔よ六條もおもしあさきのまゝに露いなお
つ夜のかきつまうあらぬはちいめあ
れうさの世やよくくあやと業とするなく

紫式部と申ハ彼石山の観世音かりに
此世にあらハれてかゝる源氏の物語
是も思へハ夢の世と人にしらせん
方便きようか綺語をもちひかれ思へハ
夢の浮橋も夢のあひだのことは
なりけり



右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正德六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校

皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛